

氏名	朝山奈津子
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第154号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉カール・リーデル（1827-1888）とライプツィヒ・リーデル合唱団の活動

論文等審査委員

(論文審査主査)	東京芸術大学	准教授	(音楽学部)	大角欣矢
(論文審査副査)	〃	教授	(〃)	船山隆
(〃)	〃	〃	(〃)	片山千佳子
(〃)	〃	〃	(〃)	土田英三郎
(〃)	桐朋学園大学	〃	(〃)	西原稔

(論文内容の要旨)

本研究は、19世紀中葉から末にかけてライプツィヒで活動した合唱指揮者、カール・リーデル Carl Riedel (1827-1888) とその合唱団 (1854創設) の活動について考察し、その歴史的な位置づけを試みるものである。

リーデル合唱団はこれまで、シュッツおよびバッハの声楽作品の受容史においてわずかに言及される程度で、包括的な研究は行なわれていない。その最大の理由は、合唱団に関するまとまった資料が手に入らなかったことにある。しかしこのほど、ライプツィヒにてリーデルおよび合唱団が所蔵していた楽譜が大量に見つかり目録化された。本研究はこれらの資料および目録を活用することで、リーデル合唱団の演奏実践に関してまったく新しい事実をいくつか発見するに至った。

その報告に先立ち、第1章ではリーデル合唱団出現の背景を整理する。

第1節ではまず、19世紀のドイツでさかんになった市民合唱活動の理念、組織と性質の変遷を追う。世紀前半に活動を開始した市民合唱団は、多くが小規模で閉鎖的な歌唱サークルだったが、世紀後半になると規模を増し、公開演奏を中心に組織的な運営を行なうものが増える。また、技術的にも、小規模アマチュア合唱団と大規模なセミプロの団体とに分化していく。

第2節では、世紀半ばから後葉にかけて真剣に議論されるようになった演奏実践上の問題点を整理する。また、こうした議論が理念や党派的主張に支配されるものであって、実践の具体的内容には大きな差はないことを指摘する。

第3節では、リーデル合唱団が活動した舞台であるライプツィヒの音楽生活を概観する。ここでは特に、19世紀中葉までのライプツィヒがきわめて保守的な傾向を持っていたこと、また教会音楽の実践はあまり充分でなかったことが明らかになる。

第4節では、カール・リーデルの略伝と合唱団の沿革を述べる。合唱団のレパートリーは15-18世紀前半までの無伴奏声楽を中心とするが、19世紀の同時代人の最新作もひじょうによく取り上げている。演目は時代順、地域ごとに配列された。さらに指揮者リーデル自ら作品解説を書き、聴衆に配布した。合唱団はこうした特徴を前面に打ち出し、多くの支持者と団員を集めた。

第2章では、プログラム冊子の解説とリーデル・アルヒーフの資料から判る演奏実践について報告する。従来、演奏団体のレパートリー研究や作品受容の研究ではしばしば、特定の作曲家ないし作品の演奏回数のみを評価材料としてきたが、それでは、演奏が聴衆にとってどんな意味を持っていたのか、と

ということが明らかにならない。そこで、リーデルの実践を観察するに当たり、本研究は「イメージ」というキーワードを導入する。「イメージ」とは、演奏を補完するような期待、予見を指す。さらに、音楽が聴覚への単なる刺激ではなく、聴体験として蓄積されるためには、それらの「イメージ」が何らかの一貫性を持っていることが肝要である。

リーデルは当時の音楽史研究の成果を解説の執筆と自らの演奏に活用した。彼は史書から得られる「イメージ」を実演してみせたのであり、聴衆が演奏とともに「イメージ」を再構成するように望んだ。本研究では、理性的で自己発展的な行為として音楽を聴くために、リーデルが音楽史という統一主題を用いたと仮定し、古い音楽を聴くとは、その「イメージ」を聴くことである、という本研究の仮説を論証する。第2章の観察からは、ヴィンターフェルト、ブレンデルが叙述したイタリアとドイツの音楽の関係がリーデルの史観の柱を成していることが明らかになる。

第3章においては、リーデルおよびその合唱団と当時のドイツの楽界との個別的な関わりについて述べる。

第1節では、全ドイツ音楽協会（ADMV）および音楽家大会（TV）とリーデルについて整理する。ADMVの初期の活動に関してはまだほとんど先行研究がないため、本項はリーデル時代のADMVについてまとめたほとんど初めての論考である。

第2節では、リーデルと何人かの同時代人たち、ヴァーグナー、ニーチェ、ブラームスとの交流、バッハ合唱団の設立メンバーとの対立関係を取り上げる。バッハ合唱団はライプツィヒに置いて、リーデル合唱団と類似の活動を展開しようとしたが、19世紀の間は不首尾に終わった二つの合唱団の明暗を分けたのは、「イメージ」の提示方法の違いにあったことを指摘する。

第3節では、リーデルの死後の合唱団について述べる。団体は1940年代前半まで続いたが、リーデルの後任クレッチュマー、ゲーラーより後の世代はレパートリーが変質し、古い作品があまり取り上げられなくなるため、本研究では考察の対象外とし、簡単な報告にとどめる。

リーデル合唱団が提案した「イメージ」に基づく聴体験、演奏会に予習してのぞむ習慣は、19世紀末以降はきわめて標準的なものとなる。クレッチュマーの『楽堂案内』（1888）はまさにそのような目的のために書かれている。リーデル合唱団が古い音楽の聴体験にとって一つのモデルを示したことを指摘し、本研究の結論とする。

#### （博士論文審査結果の要旨）

本論文は、ドイツの合唱指揮者、カール・リーデル（1827-1888年）の活動について考察し、その歴史的な位置づけを試みたものである。ライプツィヒで活躍したリーデルとその合唱団は、当時書物によってしか知られていなかった古い教会音楽作品を歴史的に系統立てて取り上げつつ、「新ドイツ派」を中心とする新しい楽曲の紹介をも同時に行う独特のプログラム構成と、その高度な技術や音楽性によって、19世紀後半のドイツの音楽実践において注目すべき地位を占めていた。にもかかわらず、その活動の全体像を明らかにする研究はこれまで行われて来なかった。折しも、リーデルが実際に演奏に用いた楽譜が近年大量に発見され、整理されたが、申請者はこれら新資料を活用することで、リーデル合唱団の演奏実践の実態に光を当てることに成功した。一方、リーデル合唱団の特徴として、リーデルが執筆する作品解説を収めた演奏会プログラム冊子が会員にあらかじめ配布されるという点があった。申請者はこれらプログラム冊子の内容を詳しく検討し、併せて関連する雑誌記事等の言説にも網羅的に目を通した上で、リーデルが聴衆に音楽史研究の成果を実際の音の響きとして体験させるといふ、一種の受容の方向付けを念頭に置いた演奏会プログラムを構成していた様子を明らかにした。このように、一次資料を丹念に調査し、まだほとんど研究の進んでいない19世紀後半の市民合唱団の音楽実践に光を当てた点で、本論文には一定の独創性と学術的意義が認められる。

しかしながら、問題点の指摘も数多くなされた。まず審査委員全員によって指摘されたように、リーデルによる受容の方向付けに関して申請者が一貫して用いている「イメージ」という概念が明確に規定されておらず、その用法や意味も一定していないため、論理的な一貫性に欠ける論述となってしまうている。また、19世紀後半のドイツにおいて市民合唱活動を促進した社会構造への精密な分析が欠けており、さらにライプツィヒ以外の諸都市における合唱活動についての記述も乏しいため、リーデル合唱団のユニークな特質が十分に明らかになったとは言い難い。このほか、演奏譜の分析における掘り下げが足りない、歴史的な曲目と新しい曲目との間の理念上の関連について実質的な考察がなされていない、論述がやや明解さを欠き、事実関係に関する理解や解釈、引用文の日本語訳等にも誤謬や疑わしい箇所が多い、などの指摘がなされた。しかし、最大の問題は、そもそも申請者がこの論文を通して答えようとした問いは何なのか、本研究の音楽学的な意義はどこにあるのか、といったより大きなパースペクティブから見た場合の問題意識の希薄さである。こうした根本的な立脚点の曖昧さのため、せつかくの一次資料の詳細な検証が、時として空回りするがごとき印象を与えてしまう結果となっていることが惜まれる。

こうした問題があるとはいえ、19世紀ドイツにおける最も有力な合唱団の一つであったリーデル合唱団の活動の全体像を初めて明らかにし、その歴史的な位置づけを試みた点で、本論文は高度な研究成果を挙げているものと認められ、よって審査委員会としては、本論文が学位取得に値するものと判断した。